

スペインマドリッド自治大学との交流を通して

—国際交流の始まりと継続にあたって—

隅 敦

〔報 告〕

スペインマドリッド自治大学との交流を通して

—国際交流の始まりと継続にあたって—

隅 敦

Artistic Exchanges with the Autonomous University of Madrid
(Universidad Autónoma de Madrid)
: In the Beginning and Continuation of International Exchange

Atsushi SUMI

摘要

筆者は、平成20年度（2008年度）以来、スペインのマドリッドの研究者と交流を行ってきた。本年度で5年目に当たることから、今後どのような展開が期待できるのか、これまでの交流を通して得た成果を一旦整理し、まとめておきたいと考えた。

キーワード：マドリッド自治大学，スペイン，交流，公立小学校

Keywords：Madrid Autonomous University, Spain, Interaction, Public Elementary School

はじめに

大学に勤務する教員が中心になる国際交流には、主として互いの研究内容に関わる交流が中心になる。筆者とスペインマドリッドの研究者との交流もちろん最初は、美術教育研究からスタートしている。しかし、互いに教員養成を行っている学部には籍をおいていることから、学校教育の場における交流や美術文化の教育に関わる交流等しだいに幅が広がってきた。本報告では、主として研究以外に関わる内容について、現時点における成果をまとめておきたい。

第1章では、交流のはじまりについてマドリッドの研究者との出会いを振り返る。第2章では、現地の学校等で行ってきたワークショップについてその内容を整理する。第3章では、筆者の現地での講演等について報告する。第4章では、現地における主な訪問先について紹介する。第5章では、マドリッドを訪れた際に訪問してきた美術館および世界遺産等について紹介する。そして、第6章では訪問に参加した学生たちの感想を項目ごとに整理し直して掲載する。

1 交流の始まり

(1) InSEA World congress 大阪大会において

本交流は、平成20年8月に「InSEA World congress 大阪大会」に参加しマドリッド自治大学大学准教授パブロ・ロメロ氏の研究発表を聞いたことをきっかけに始まった。それは、日本のアニメやマンガなどの影響が、スペインの子どもが描く絵にも現れているという内

容だった。もちろん、その事実は知っていたが、筆者の想像以上に日本のマンガやアニメが彼の地の子どもの絵画表現に影響を与えていることに驚かされた。そこで、発表終了後、簡単な感想を述べて名刺を代表発表者のロメロ氏に渡した。彼は、「Thank you. Could you corroborate with us ?」と言ったので、軽く「O.K.」と答えておいた。当然、何か連携を行うと言っても、今後Eメールで情報のやりとりをするのだろうと軽く思っていた。そして、ほとんど発表者の顔も忘れかけた3ヶ月後の11月18日の朝、「Collaboration with UAM University」とタイトルされた大量のテキストとワードの添付ファイルがEメールで届いた。その内容は、「12月の中旬に富山に行くので、ぜひ、小学校と中学校で、描画の資料を集めるための機会を設定して欲しい。そちらが望めば富山大学でのレクチャーも可能だ」とあった。それから大急ぎで、まず、自分の講義や出張や会議の予定を確認し、附属小・中に連絡を行い、協力をいただけるという返事をいただき、何とかメドがついたので、3日後の21日には返信のメールを送った。その後、遠くスペインと毎日のようにメールのやりとりをしながら予定を詰めていった。

(2) ロメロ氏の再来日

1ヶ月後の12月14日、本当にロメロ氏が富山にやって来られた。そして、その日から17日までの4日間滞在され、日程を無事乗り切ることができた。

ロメロ氏が提案された授業は、日本の有名な詩である「短歌」「俳句」を元に子どもたちが連想した絵を描かせるという内容と、自分のお気に入りのものを描かせる内

容であった。

附属小学校の5年生のクラスをお借りして筆者が藤原敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」という短歌を元に線描をさせた。5年生ということで、社会科で歴史を学習しておらず、かえってその方が、心に浮かんだ情景を制約なく描けるのではということになった。実際に児童が描いた絵からは、歴史的な背景よりも、自分たちの心象風景的な表現が多く見られた。

附属中学校では、3年生での授業を急遽お願いし、同じ内容で絵を描かせた。こちらは、歴史をすでに習っているので、表現の中にその時代を意識させるものも見られた。

大学では筆者の担当する講義「図画工作」において大阪での発表と同じ内容で講演をしていただいた。学生たちは、日本のアニメやキャラクターが、スペインの子



もたちの絵画に影響を与えていることについて驚くと共に、国を超えてこうした研究をし

ておられる学者の存在にも心を動かされたようだった。

(3) 最初の渡航中止

こうした縁ができたことで、次はこちらからスペインに渡って向こうの美術教育の事情も把握したいと思うようになった。そこで、学部の国際交流基金の申し込みを申請したところ無事通過し、6月にマドリッドに行く予定を立てた。さらに、筆者が指導している図画工作科ゼミの3人の学生も自費で参加を希望し、着々と準備を進めていった。学生たちはあまり資金がないので、大学のドミトリーを借りることはできないかとメールを送ると、自宅にホームステイをさせることができるから心配するなと書いてこられた。

しかし、その年、新型インフルエンザの世界的流行が始まり、特にメキシコで最初の患者が出たことから、大学当局から同じ言語圏であるスペイン国内へ渡航禁止の通達がなされ、ロメロ氏にお断りのメールを送ることになった。受入の綿密な計画を立ててくれていたマドリッド側に対しても申し訳ない気持ちで一杯だったが、事情をきちんと理解してくださった。

そして、新型インフルエンザの流行が落ち着いた3月の中旬に筆者が単独で渡航し、毎年マドリッドに出向いて交流を続け、翌22年度からは、図画工作科ゼミの学生を中心に本学部学生および院生の参加希望者を募って訪問を行ってきた。

2 ワークショップの実施について

最初に筆者が単独で訪問したときから、相手側に要請されて現地で美術教育に関わるワークショップを行ってきた。その内容は、最初の2年間は、相手方に請われた内容を実施してきたが、昨年度から、こちらから内容を提案して実施することとなった。以下、その概要について紹介する。

(1) 平成21年度(2010年度)

①インファンタ中等学校(Galapagar "Infanta Elena") における絵画指導

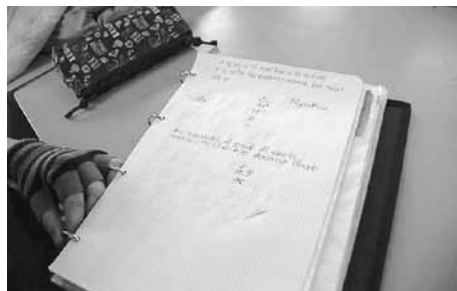
対象：中等学校4年生生徒

内容：藤原敏行及び良寛の和歌からイメージした絵画

この学校で行う授業は良寛と藤原敏行の和歌からイメージした絵を描くというもので、前年にロメロ氏が来日した際に本学の附属小・中で実践したものだだった。

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれる」藤原敏行

「山かげの岩間を伝う苔水のかすかに我はすみわたるかも」良寛



筆者が、ホワイトボードにこれらの和歌を書いて英語で説明をし、それをロメロ先生

がスペイン語に訳して、生徒に描かせるという方式だった。おもしろいことに筆者のへたな日本語の文字に興味を示して、それを書き写そうとしている生徒が2、3人



いた。彼等はこの文字を線で書く文字というよりも、むしろ絵画のように捉えているよう

で、まるでデッサンをする時のようなタッチで鉛筆を動かして描いている女子生徒もいた。この日本語の漢字や平仮名をマークのように認識してその形を愛でるという行為は、その他の場面でも多く経験した。

自然環境の状況が日本と全く違うので、完成する絵に興味があった。マドリッド近郊にはあまり小さな山がなく、しかも、ある山の風景が日本とは全く異なる荒涼とした山なので、良寛の和歌の絵は、木の生えていない切り立った山から青い水が流れている様子を描く学生がほとんどだった。一方、敏行の和歌に対しては、さまざまな、叙情的な絵を描いている学生もいた。中には日本の女子高生のようなセーラー服の美少女が風に吹かれてい

る様子を描いた者もいた。

興味深かったのは、定規を使って描いたり、下描きの線に蛍光灯を使って下から光を当てるトレース台で写して画用紙に描いたりとは日本では指導しない手法を用いていることだった。この手法は、彼等が使っている教科書にも出ており、手本を写して描くことは、スペインの美術において指導する内容であると分かった。

②ペラレホ小学校 (Alpedrete "Peralejo") における絵画指導

対象：小学校5年生児童

内容：良寛の和歌からイメージした絵画

ここでの授業は、良寛の和歌から一つ選んでそれを絵にするというものである。まず、筆者が黒板に「子供らと手たずさえて春の野に若菜をつめば楽しくあるかな」と書き、それをロメロ氏がスペイン語に訳された。中等学校の生徒のように日本語そのものに興味を持っている印象はなかった。

子どもたちの描く絵は、日本の同年代のそれと比べて、2, 3年幼い感じではあったが、変にかっこうをつけない



分かりやすい絵だった。あまり、日本のマンガやアニメーションの影響を受けている

様子は見られず、絵画の発達段階を踏まえているような素直な表現だった。

ただし、作品の世界をイメージさせるため思い切って前に座っていた女児二人を伴って教室の中央で動作化したことで、筆者や子どもをそのまま絵の中に登場させた者もあり、和歌だけを聞いて想像した内容を絵に描くという主旨から離れてしまった。

③ペラレホ幼稚園 (Alpedrete "Peralejo") における造形遊び

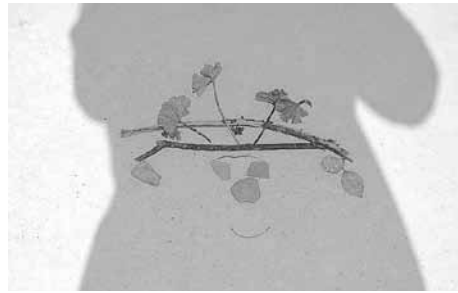
対象：幼稚園年長児

内容：自然物を用いた造形遊び



小学校と同じ敷地に併設された幼稚園でのワークショップは、ロメロ氏の妻であ

り、マドリッド自治大学教育学部教授であるエスティファニア・サンズ・ロボ氏が、筆者の論文に興味を抱いた自然物を用いた造形遊びを行って欲しいという要望で行った。



場所は、小学校に隣接する公園であり、広くてきれいで、気温が20度近くまで上昇した

当日は非常に気持ちよかった。しかし、つい一週間前に約15cm雪が積もったということで、草花は少なく、木々は芽吹いていなかった。

まず、公園の中央にあるコンクリートで固めたスペースで園児たちに、できるだけシンプルな英語で自然物を集めてそれを組み合わせることを提案した。エスティファニア氏が、それをゆっくりとスペイン語に通訳し、最後に筆者が「レッツ トライ！」と叫ぶと、彼女がそれを訳し終えない内に園児たちは一斉に散らばって行った。そして、あちこちで石や小枝を集め始めた。

あまり葉っぱや草がなかったが、園児たちは主に顔を小石や小枝でつくっていた。自分とそっくりな顔をつくって満足そうにしている子がいるかと思えば、中には景色をつくっている子がいて驚かされた。途中で筆者を呼んで「どう！」と、自慢そうに見せてくれる子もいた。寝転んで作っている子もいて楽しい雰囲気だった。この様子をビデオやカメラに記録しながら、国は異なっても子どもの基本的な造形表現には大差がないことを確認できた。

(2) 平成22年度(2011年度)の実践

①マドリッド自治大学 (Universidad Autónoma de Madrid) における「墨 (sumi) ワークショップ」

対象：幼児教育学科学生

内容：墨を用いた書写

エスティファニア氏が受け持つ幼児教育学科の学生約60名を対象に、墨を用いた書道と水墨画の実習を行った。

そもそもこのワークショップは、日本では「Syodo」が美術の範疇であり、美術教育の中で教えられていると



いう認識を相手大学側がもっていたので、依頼されたものだった。

したがって、プレゼンテーションで、日本の義務教育においては、書道は国語の中で指導される内容であることを押さえた。欧米では日本の書道に当たるカリ

グラフィーがアートの中に位置づけられていることからの誤解かもしれない。しかし、高等学校以上の学校



では、書道が芸術分野で指導されることも紹介した。

また、現在の日本ではアーティ

ストが書道のパフォーマンスを行ったり、マンガ家の表現の試みとして墨と筆を用いた表現があったりすることを紹介した。実習として学生には、「一、二、三、」等の数字および「大、小」の練習をさせ、その後「へのへのもへじ」の顔文字を書かせ、意味はないがこうした文字で遊ぶ文化が日本には昔からあったことを知らせた。この過程では、本学の学生がそれぞれ補助について、筆の持ち方や筆の運び方等、書写の基本を教えた。

以下、現地学生のワークショップに参加しての感想¹を紹介する。

- We found it very interesting, unusual. This should not have done if they had not been here.
- We have approached a little to Japanese culture
- We found little time, maybe next time it could be done in two sessions.
- Calligraphy is an art: we must take into account many factors and it is great to study the line and form in this way
- It seemed like a good way to learn a kind of artistic expression, he served as an exchange of language and to learn more their about their way of teaching
- We found it was a very interesting workshop to learn and discover things very different to which we are used to do and see
- It was very interesting to learn the techniques used and the fact that they considered calligraphy as an art
- I found it very interesting and very well explained by both the teacher and by students
- They communicate the Japanese artistic culture in a simple, fun and practical way
- It was very interesting what they explained. They were very friendly and helped us with everything we need
- I found a very fun class.
- We liked the workshop, especially the fact that the japanese teacher and the students involved in helping us to get the brushes, how to trace, and so on. It was very interesting and the professor made it very enjoyable
- We were surprised how is education in Japan and how important is this activity (syodo) there.

③ペラレホ小学校（Alpedrete "Peralejo"）における「書道ワークショップ」

対象：小学校1年生児童

内容：墨を用いた書写

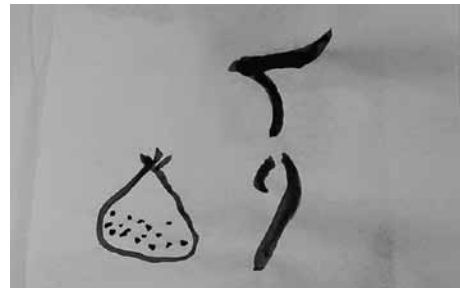
この年は、当時の幼児が進級した小学校1年生ニクラ



ス17人と18人を対象にした。事前に、同時にニクラスを担当するということを聞いていな

かったので、急遽、筆者が行きさして指導するというスタイルで、学生を2グループに分けて、補助をさせるというスタイルをとった。

まず、簡単な線や曲線、○や×を筆で書く練習をさせた後、ちょうどその頃スペインの食料品店で販売されている栗を平仮名と簡単な墨絵で描かせることにした。まず、その形を筆で描き、その名前Casta noを当てさせて、「くり」という平仮名を栗の墨絵と共に書かせた。その後、梨の墨絵を描きその名前Perasを言わせた後、「なし」と平仮名で書かせた。



日本では1年生で習字は教えないので、事前にメールをお願いしていたように古新聞で

机を覆い、エプロンや汚しても構わない服装をしておくなどの準備がなされていた。

最終的には、用意していった習字用半紙がなくなるぐらい子どもたちはたくさんの文字を書くことができた。

（3）平成23年度（2011年度）の実践

この年は、和紙を用いた紙工作を実施する計画を予め立てて、マドリッド側に打診し、準備を行っていった。また、昨年度と異なり、対象が大学の小学校教員養成課程の学生と現地の小学校2年生の児童ということで、日本の図画工作科の教科書題材を実施することにした。

①ペラレホ小学校（Alpedrete "Peralejo"）における「和紙ワークショップ」開催

対象：小学校2年生児童

内容：和紙を用いた吊す飾りをつくる内容

ワークショップは、昨年と同じ子どもたちが2年生になったクラスにおいて実施した。担任の先生も昨年度と同じ先生であった。今回は同時にワークショップができるように、提示物や材料を分けて用意していた。

題材は、「みんなでかざろう」という1年生用の題材



を行ったが、ワークショップのタイトル名が「和紙ワークショップ」であることから、材料に和紙を用いることと、折り紙を組み合わせて吊す飾りをつくる内容にした。今回は学生たちが予め提示用の見本を作っておいたので、画用紙を用いて大きめの折り紙で、分かりやすく見本を作成していた。

現地児童は折り紙の作成については、ほとんど経験がないようで、学生たちが予め作成しておいた見本を見ながら、丁寧に作品をつくっている様子が伺えた。

②マドリッド自治大学 (Universidad Autónoma de Madrid) における「和紙ワークショップ」

対象：小学校教員養成課程学生

内容：和紙等を用いた吊す飾りをつくる内容

小学校教員養成課程の美術の講義に参加して、ワークショップを開催した。最初に、日本の和紙を使った伝統文化について筆者が講義を行い、その後、学生が中心に



なって英語で「みんなでかざろう」を実施した。前半の講義部分では、元々中国から伝わった紙の製法が日本で広まり、文字を書くだけでなく、武士の兜や衣服まで用いられてきたことにも触れて、「和紙」が日本で果たしてきた役割を紹介した。

小学校では折り紙の鶴は学生が予め折ったものを使ったが、大学生には、折り紙を全部折らせる内容にした。当方の学生6名が分担してグループごとに指導にあたり、和気あいあいとした雰囲気の中で、作業を進めさせることができた。



最後に、完成させた吊す飾りは、日本の小学校の1年生の教科書に掲載されている題材であり、将来教師になった際には、本日の経験を生かして欲しいと伝えた。

を行ったが、ワークショップのタイトル名が「和紙ワークショップ」であること

3 講演その他の開催について

(1) 平成21年度 (2010年度)

マドリッド自治大学 (Universidad Autónoma de Madrid) 学生対象講演

約100人の教育学部の学生たち相手に「Educación Artística en Japón hoy (日本の美術教育の今)」と題した講演を依頼されていた。講演内容は、筆者が小学校教員時代に行った事例を紹介しながら、日本の学習指導要領や評価の方法などを具体的に提示した。



筆者が英語でプレゼンの文字を読みながら、それを通訳の方がスペイン語に訳す方式

をとった。しかし、専門知識のほとんどない彼女は時に翻訳に窮し、隣に座ったロメロ氏が、それをフォローするという方式に変わっていった。そもそも、今回の発表の内容は、来日したロメロ氏に、自然素材を用いた造形遊びの画像を見せ、その際、彼に筆者の関係論文を差し上げたことに始まる。小学校の低学年や幼児の造形活動について指導を行っているエスティファニア氏が、論文の英文のタイトルと本文に付け加えられた画像を見て筆者に依頼されたということだった。

ただ、言語による伝達はあまり当てにならない状況だったが、プレゼンテーションで見せた画像の印象は強かったらしく、思ったより反応がよかった。特に水を使った造形遊びの画像を見せたときには、かなり感嘆めいた声が聞こえた。美術の分野は、見るだけで理解し合える点においては万国共通であると確信した。

約1時間、プレゼンを見せながら講演をした後、質問タイムを設けた。

その際の質問と回答の一部を次に紹介する。

Q 「花やはっぱをならべて」の授業でも、評価をするのか？

A 当然だ。4つの観点があるのでできる。アビリティがついているのかどうかを、確認しなければならない。

Q 評価を実際にするためにどうするのか？

A 造形遊びは基本的には作品が残らないので、ビジュアルの記録をカメラやビデオできちんと残していくことが大切である。実は、今日見せたプレゼンで使った画像には、まだ、デジタルカメラの性能がよくなかった頃のものもあり、それはフィルムカメラで撮影したものをデジタル化して使っている。きちんと記録していれば評価に利用できる。

Q 造形遊びをすると衣服が汚れることが予想されるが、そのことで親からクレームはないのか？

A 極端に汚れることもあるかも知れないが、日本では、体育用のユニホームがあるので、それに着替えてやることもある。

Q 一人でやる子や友達といっしょにやる子が一つの授業の中にいて大丈夫か？

A それは自由にしている。一人でやっている子が友達とやっている子と一緒にいってしまう場合がある。反対に友達とやっても離れていく場合もある。これが造形遊びのよいことの一つである。確かに心配な問題が発生する場合もあるが、これは他の教科も一緒ではないか。

Q 美術は独立した教科なのか？（ちなみにスペインでは、芸術として音楽と同じくくりになっている）

A そうだ。独立している。

Q 日本の小学校では美術の専門家の先生が、美術の授業をすることがあるのか？

A もちろんたまにはある。しかし、多くの場合は専門家ではない。

Q 日本の図画工作科の授業時数が減ったことを示したプレゼンをもう一度見せて欲しい。週に何回から何回になった計算か？

A 以前は週に2回あったが、今は1回ないしは2回、そして、0回である。

その後、この講演を聴いて、学生や先生方が挨拶に来られ、しばらく彼等とやりとりすることになった。中でも日本の美術教育の評価に観点が4つもあることが素晴らしいと言った博士課程の学生²が印象的だった。

（2）平成22年度（2011年度）

リサーチミーティング

内容は、エスティファニア氏からの要望で、昨年学生相手に行った講演「日本の美術教育の今」の中身から「Natural Materials for Art Education in Elementary School, in Japan」と題した自然素材を用いた図画工作科の題材事例の発表を中心に行った。主に日本の「造形遊び」の題材で事例を紹介したこともあり、発表後、その指導方法について詳しく聞かれた。小学校や中学校で行われる美術の内容が、スペインでは、手本をそっくりに描き写したり、塗り絵をしたり、型紙を切って工作をするという内容がほとんどなので、でき上がる作品が個別に異なるという授業は、相手側にとってかなり興味が沸いたようである。

（3）平成23年度（2011年度）

リサーチセミナー

修士課程の学生も参加する予定であったが、ストライキをして授業に参加できない（経済危機にあるスペインの現状を反映したもので、事務系の職員のストライキに同調した修士の学生が参加したらしい）ということだったので、数人の教員と学部生を相手に行った。タイトルは「Development of a System Minimizing Elementary School Teachers' Sense of Difficulty in Arts and Handicrafts Subject Evaluation」（小学校

教員のための図画工作科評価の困難意識を低減するシステムの開発）であり、6月にブタペストで行われたInSEAヨーロッパ大会で発表した内容を行った。

小学校の美術非専門教員対象として手軽に、しかも、児童・生徒の造形行為をできるだけ正確に評価するシステムを、スケッチブックや教科書そのものをポートフォリオとして評価に活用していく方法として発表した。

学部学生から出た質問では、スケッチブックのポートフォリオを教科書に用いたものに変更した理由について聞かれ、もちろんスケッチブックを利用してもよいのだが、保管する場所の問題が必ず出てくることなど、日本の実情について答えた。

4 これまでに訪問した学校及び大学について

（1）マドリッド自治大学

マドリッド自治大学は、1968年に設立された、教育学部から医学部までもつ総合大学である。

広大な敷地に学部が点在しており、筑波大が現在の広島大以上の広さである。マドリッド中心のチャマルティン駅³から、Cercanías（マドリッド近郊線）で、2駅目に立地し交通の便のよいところにある。周囲は、馬や羊の放牧地で背の低い灌木がまばらなこの大学は学部ごとに校舎の外壁の塗装が異なり、教育学部はグリーン系である。スペインではいろいろな学校で、教育にふさわしい色として校舎内外にグリーンが使われることが多いということだった。

校舎内は、直方体を互い違いに組み合わせたようなつくりをしており、階段を上がったたり、下がったりして目的の教室にたどり着くというイメージがある。エス



ティファ氏は「まるでラビリンスであり、決してバリアフリーではない」と言われるように

に、慣れるまでは、目的の教室にたどり着けないこともある。なぜ、このようなつくりなのかと質問したところ、学生運動が激しかった頃に建設したので、わざと、学生が校舎内を走り回ったりできないようにしたということだった。当時のフランコ政権のことを考えると、当然だという言い方をされていた。

（2）インファンタ中等学校（Galapagar “Infanta Elena”）

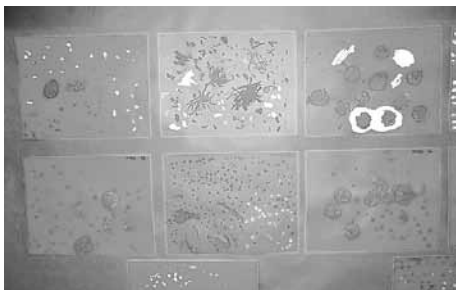
平成21年度当時ロメロ氏の所属は基本的には大学だが週に3回勤めていた4年制の中等学校（日本での中学校3年間と高等学校1年間にあたる学年が通う学校）。この学校は南米やモロッコなどの国からの移民がいたり、低所得層の子供たちが来ていたり指導上大変なことが



多いということだった。実際トイレに入ると、便器に吸ったばかりの煙草が捨ててあったり、校舎内にも落書きがあったりした。ただ、美術室に入った筆者に対して生徒達はちらっとちょっと恥ずかしそうに視線を向けてきたので、どこの国の若者も似たようなものだと思った。確かに、髪の毛を隠したイスラム教の女性徒もいたし、ウクライナからやってきたという生徒、アルゼンチンから移民の生徒等、さまざまな民族がいることが分かった。しかし、筆者自身の自己紹介の時に、どんな日本のマンガを知っているかと聞くと一斉に「NARUTO」⁴という声が返ってきた。普通に日本のサブカルチャーが広まっている現実を知らされた。

(3) ペラレホ幼稚園 (Alpedrete "Peralejo")

小学校と同じ敷地の並びにある幼稚園。途中の廊下には園児が描いたジャクソン・ポロック風の作品がたくさん掲示してあり、結構マチエールに凝ったものもあった。ミロやダリの絵を貼り絵で表した大き目の共同制作風の



作品もあった。エステファニア氏に聞けば、筆者がワークショップを行うクラスの担任はこの幼稚園のアートエデュケーションのディレクターだったそうだ。その先生は、エステファニア氏の教え子で博士号をもっていることだった。どうりで小学校の教科書とはかけ離れた意欲的な造形遊びの実践が多いはずだった。

筆者の行ったワークショップの場所である広場に移動



する際にはきちんと1列に並んで、前の子どもの衣服の裾を持って移動し、返りも後には、きちんと先生の指示で、みんなで片付けて元の部屋の中に入っていた。こうした躰は、どこの国でも一緒であると感じた。先生が今日は何をつくったの?と質問したら、それに答えていた。こうした造形遊びでも、やりっ放しではなくまとめの時間を設けているところに感心さ

せられた。

他の園児達の作品としてプラド美術館に鑑賞に行って、その中の何枚かの絵を思い出させて描かせた実践もあり、マドリッドの子どもたちにとって、身近な存在であることも意識させられた。

(4) ペラレホ小学校 (Alpedrete "Peralejo")



学校の周囲は高い塀で囲まれ入校する際には、監視カメラから観察され、解錠してもらわなければならない。基本的には通学は親が車で行うことが前提のようであり、朝は学

校の周りが車のラッシュになる。この学校の教室の掲示物や内装の色遣いはいわゆるパステルカラーと呼ばれる淡い色で統一されていて明るい。前述した淡いグリーンも多用されていた。

少し驚かされたのは、いつ行っても校長先生の服装はブルージーンズとカーキ色の長袖Tシャツといういでたちであることである。実はこの服装は、午前中に約30分ある教師たちの休憩の時間に、校長として運動場で遊ぶ子どもたちの面倒をみるためだということだった。反対に先生達の休憩タイムは、クロスの敷かれたテーブルのある食堂にコーヒー、紅茶、牛乳、オレンジジュースなど飲み物各種、クッキーや菓子パン、パン、オレンジやバナナなど果物各種があり、自由にとって食べてよいという自由なもので、なかなか休憩時間もとれない日本の実情とはかけ離れていた。この小学校では常勤で約30名の教師がクラス20名ぐらいの児童を受け持っており、この点もうらやましいと感じた。

5年生の教室の後ろに「English for us」という掲示コーナーがあり、英語の時間もあるので、担任の教師も英語でどんどんいろいろ説明してくださった。ワークショップの途中で教室に肢体不自由の男児が車椅子に乗せられて入ってきた。その子の席は最初から空けてあったので、普段は特別支援学級にいて、こうした美術や音楽の授業など参加可能な場合は、交流学級に入ってくるようになっていた。

校内は至る所に児童の手による掲示物が多く見られ、平成21年度に訪問した際は、そのクラスではイースターのお祭りの卵をモチーフにしたつくりかけの掲示物が準



た掲示物がつくられていた。また、ピカソの「ゲルニカ」を模写した大きな共同作品が毎年のように掲示され



ており、昨年度は、その絵を見学している児童のモノクロ写真と一緒に、掲示物のほぼ実物大の複製画を合わせた展示もされていた。ここでもマドリッドの子どもたちが地元の美術館に訪れる体制があることを知らされた。

5 美術館および世界遺産等の見学について

マドリッドを訪問した際には毎年、美術館及び世界遺産等の見学を行うことにしている。以下、主要な4カ所について紹介する。

(1) Museo del Prado (プラド美術館)



世界有数のコレクションを誇る美術館であり、ベラスケスやゴヤの作品が見られる。

所蔵作品が多く、ある程度焦点を絞らないと満足に作品鑑賞を行うことができないほどである。筆者がロメロ氏に案内されて訪れた平成21年度は、入館料が無料になる17時以降に入館したが、22年度と23年度は、国際学生証を提示すれば学生たちの入館料が無料になることから、大学等の訪問の予定のない時期に見学を計画した。

プラド美術館での鑑賞は、入館するためには必ず、外で行列に並ばなければならないが、午前中約2時間以上かけて行うことにしている。平成23年度の訪問前には予め画集や旅行ガイドなどで展示作品を下調べさせておいたので、実物を前にした際にその作品に対する印象は強かったようである。

特に、実物を見ることで、そのサイズを体感できる意味は大きい。図録に掲載された作品は印刷するためにその大きさを統一してあり、イメージしたサイズよりも大

きかったり、小さかったりする。

その一方で、単に有名作品だから、鑑賞者が多く、人だかりができていっているわけではなかったりと、図録やネットなどの画像では確認することのできない詳細な事実についても把握することができる。

(2) Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofía (ソフィア王妃芸術センター)

元は病院の建物を美術館に改装した建築で、正面に2基あるガラス張りのエレベーターのデザインが、古い石造りの建物とマッチしており外観が美しい。

この美術館では、ミロやダリをはじめとしてスペインの近代の作家の作品を鑑賞することができる。特に小学校の図画工作科の教科書⁵に掲載されているピカソの



「ゲルニカ」も見ることができることは意味がある。見学すると教科書では分からないその

大きさに驚くと同時に、ディテールを間近に見てその迫力に圧倒される。

毎年、マドリッドの美術館では、たくさんの小学生や園児たちに会う。大体一つのグループごとに20人前後の子どもがおり、教員が3名引率に当たっている。そして、その中の一人が必ず作品の説明をしており、美術館の学芸員任せにされていない様子がよくわかった。もっともあれだけの数の子どもを連れた団体が訪れたら学芸員が対応できないのは当たり前であるが、このような見学が日常的に行われていることに、世界的有名な美術館を有する国の自国の文化に対する教育における対応の素晴らしさを感じる。

(3) Museo de Arte Thyssen-Bornemisza (ティッセン・ボルネミッサ美術館)

元々は、ティッセン＝ボルネミッサ男爵家の個人コレクション。平成23年度は初めてこの美術館を見学した。ちょうど、マルク・シャガール展を企画展として行っていたので、常設展との共同のチケットを購入し、双方の美術作品を鑑賞した。

常設展は、14世紀からのスペイン絵画を見ることができたが、特に近代以降の作品コレクションは、富山県立近代美術館の常設展示作品と作家がダブっており、反対に近代美術館の所蔵作品の充実ぶりを改めて確認させられた。

(4) Segovia (セゴビア旧市内)

チャマルティン駅から高速鉄道で約30分の距離にある、中世の都市がそのまま保存された世界遺産の街。ローマ時代につくられた水道橋やディズニーの白雪姫の城のモデルにされたというAlcázar (アルカサル) 城は特に



れ残されているのかについてお聞きすることができた。ローマ時代の水道橋はもちろん、中世の門がいつのまにか建物に組み込まれている光景など、指摘されなければ気がつかないようなさまざまな説明が受けられた

(5) Monasterio de El Escorial (エル・エスコリアル修道院)

マドリッドから約50キロ離れた位置にある中世の修道院。1561年、スペイン王フェリペ2世により建造された。1584年には日本の天正遣欧少年使節が訪れている。

ペラレホ小学校から車で30分の距離にあることから、毎年小学校の訪問の後、ロメロ氏とエスティファニア氏の車で案内してもらっている。ちょうど、平成23年度はこの修道院の建築に関わる企画展が行われており、前年



度の見学時では見ることにできなかった建築資料や当時の建設機械の模型などを見ることができた。こうした歴史的建造物は、石材でつくられており、日本の明治以前の伝統的建築物のほとんどが木材であることを考えれば、同じ世界遺産として登録してある宗教に関わる建造物が全く異なる歴史や風土の中で、残されてきた意義が良く理解できる。建築デザインも、図画工作や美術の教科書にも掲載されている事実を学ぶことができる。

6 学生レポートから

帰国後、訪問に参加した学生が各自の印象に残った点をレポートにまとめた。その内容は、多岐にわたり、学

美しい。エスティファニア氏の故郷ということで、お二人の案内で旧市街地を歩いたことで、昨年よりもより詳しく街の盛衰の歴史や、現在も中世の建築物がどのように生かさ

生たちの訪問が意義のある内容であったことが伺える。抜粋して整理し直し、一部を以下に紹介⁶する。

(1) 平成22年度(2011年度)

①ペラレホ小学校(Alpedrete "Peralejo")における書道ワークショップ

「パレレヨ小学校での小学校一年生向けのワークショップは、小学生の無邪気さや素直さが見て取れるものだった。書くものとして、大学生を相手に行ったときには漢字やひらがな、カタカナといった文字を書いていたが、小学生のときには様々な形を書いた後に『くり』という文字とその絵を描くことによって意味づけを行った。子どもたちの中で意味を持たない絵や図が意味を持ったことや、初めての筆と墨の感触は、驚きと楽し



さの発見につながったらしい。半紙に大きく『くり』と書いて、『くり!くり!』と私たちに自慢げに見せてくる姿や、早く早くと紙を求める姿はとても微笑ましかった。あまりにも子どもたちの書くスピードが速いのであつという間に紙はなくなってしまったが、それでも書き終わった紙の余ったところを探して書いている姿は、見ていてとてもうれしい気持ちにさせてくれた。子どもたちが日本の『習字』を楽しんでいる姿は、やはり学生と一緒にいったときにも感じたように私自身も楽しみながら行うことが出来た。(竹岸綾希・学校教育コース3年)

②マドリッド自治大学(Universidad Autónoma de Madrid)における書道ワークショップについて

「マドリッド自治大学では、学生向けの『習字』のワークショップを行い、スペインの学生に日本の習字とはど



ういうものなのかを知ってもらった。スペインにおいて、日本の習字が美術教育で取り扱われていると考えられていると聞いたとき、素直に驚いたことを覚えている。だからなのか、どの学生もワークショップの中で姿勢や筆の持ち方についての注意をしていることに驚いているようだった。また、準備されているものの中には絵筆なども混ざっていたため、学生が美術教育としてこのワークショップに臨んでいたことが窺い知れ

た。」(竹岸綾希・学校教育コース3年)

③マドリード自治大学(Universidad Autónoma de Madrid) 学生との交流について

「学生に学内を案内してもらったり、授業と一緒に受けさせてもらったりと学生と触れ合う機会をいただいた。学生たちと話していると、さまざまな年齢の人が同じ講義を受講していることがわかった。彼らの中には、科学などを専門的にほかの学部で学んでから教員養成系に進んでいる人も多くいるようだった。一人ひとりが専門性を持ち、それぞれがはっきりとした目的意識をもって授業に挑んでいるからか、参観させていただいた授業はどれも活発だった。休憩時にはカフェテリアやテラスでゆっくりしている様子もみられ、日々の生活にメリハリがあるように感じられた。」(谷川瞳・大学院教育学研究科1年)

「Work Shop後の学生との談話の中で、どの学生も“先生になる”という強い目標を明確に持っており、そのために自分のすべきことやビジョンを持っており、大変感心した。私が仲良くなった学生は、小学校の教員になるために、英会話、ピアノ、ダンス、絵画など、マルチに活躍できるよう、自主的にやっていると話していた。また、規則があるわけではないが、特別な理由がない限り、ほぼ全ての学生が教員になるための試験を受けると聞いて驚いた。富山大学では、人間発達科学部に所属していても、全員が教員採用試験を受けるわけではなく、それぞれ自分の選んだ職種で就職していく。それぞれに良い面・悪い面があり、どちらが良いといったことではないが、教育学部に属する学生のほとんどがここまで教師になりたい願望が強いのは、学部やスペインの教育制度に何か関係があるのかと思った。」(渡辺みなみ・人間発達科学部学校教育コース3年)

④教員養成のあり方について

「学部の教授方とスペインと日本の教育について話し合う時間が設けられた。ここで聞いたことは、日本の様子とあまりにも異なっていて驚きの連続であった。スペインの教育実習の期間は、1年生の場合は1ヶ月、2年生の場合は2ヶ月と学年の数字毎に上がっていく。協力校に関しては、富山大学(小学校の場合)は、2校だが、マドリード自治大学では50から60校の協力校がある。1校に1人の実習生が入り、1人の実習生につき1人の教授がつくというきめ細やかなサポートがあるそうだ。そのようなサポートがあると、実際に教職現場に出た時に即戦力になることのできる人材を育成できるのではないかと感じた。また、学生のモチベーションを常に高く維持することもできるのではないかと思った。」(渡辺みなみ・人間発達科学部学校教育コース3年)

「スペインでは大学と協力校の協力の下数ヶ月にわたる教育実習を行い、それぞれのポートフォリオを作成するそうです。日本は大学で基礎を学び、現場に出てから教員としてのスキルを磨いていくイメージですが、スベ

インでは大学生のうちから教員としてのスキルを実践的に学んでいるのだとわかり驚きました。そうした心構えは是非学ぶべき所があると感じました。」(角間葉子・学校教育コース3年)

⑤美術館等訪問について

「プラド美術館やソフィア王妃芸術センターに行き、多くの名画を鑑賞してきた。有名な作品は今まで教科書ぐらいしか見たことがなかった。しかし実際に近くで見ると筆のタッチの細かさ、ゲルニカの大きさの迫力、ピカソの鮮やかな青色の色彩など多くの新しい発見ができた。近距離での名画の鑑賞は細かい技術を見ることができ、幸せな時間だった。鑑賞して改めてピカソ、ベラスケスなどの芸術家たちの凄さを実感した。また、世界遺産のエル・エスコリアル修道院にも行った。天井に昇天する天使や神様、人間の描写が細かく大きなスケールで描いてあり、天井を見た瞬間、息を呑んだ。宗教にも美術が存在しており、スペインでの美術の存在の大きさを実感した。」(中島由貴・学校教育コース3年)

「美術館に行ってもまず驚いたことは、学割の充実である。プラド美術館では、チケットを購入する際、学生証を提示すると入場料が半額になった。翌日訪れたソフィア美術館は、学生は無料だった。日本にも美術館での学割はあるが、ここまでの優遇を経験したのは、私は初めてだった。さらに、美術館に入ると、子どもたちの姿が多いことに驚いた。小学校低学年ほどの子どもたちが、絵画の前に座り込み、学芸員らしい人の話を聞いたり、模写をしたりしているのである。これが特別なことではなく、よくある光景であるというのだ。このようにマドリードは、美術館と学生、子どもとの距離が近く、美術に触れる機会を得やすい環境が整っていると感じた。」(谷川瞳・大学院教育学研究科1年)

⑥文化の相違点について

「スペインにいてまず強く感じたことは日本との文化の大きな違いです。特にスペイン特有のシiestaタイムには大変驚かされました。個人営業の店のほとんどは2時から4時の間は店のシャッターを下ろし、お昼休憩をとるので、その間町はとても静かで寂しいものを感じられました。年中無休が一般的、24時間営業もそう珍しくない日本の店とは全く対照的で、異国の文化を肌で感じる事がとても多かったです。またトイレの設備や味付けのバリエーションなど些細な部分で日本の文化のきめ細かさに気づくことができました。」(角間葉子・学校教育コース3年)

「まず驚いたことが食文化だった。スペインは14時に昼食がある。だから空腹時にオリーブオイルの料理を多く食べた時は辛かった。しかし2日目になると、自分の最適な量、空腹感に慣れて味を楽しむ余裕が出てきた。この食文化に慣れるまで辛かったが、異文化において、体で慣れることは必要だと思った。」(中島由貴・学校教育コース3年)

⑦まとめ

「今回は大学訪問や小学校訪問、ワークショップなど個人で旅行した場合では見ることのできない異国の文化、考えに触れることができたと思います。他の国を知ることにより日本という国を客観的に見られるようになった気がします。日本の素晴らしさを再度実感できたと同時に、日本はまだ他国に学ぶことがたくさんあると感じました。今回の研修で感じたことを生活の中で生かして行けたらいいと思います。」(角間葉子・学校教育コース3年)

(2) 平成23年度(2011年度)

①ペラレホ小学校(Alpedrete "Peralejo")における和紙ワークショップ

「私は、ペラレホ小学校とマドリッド自治大学を訪問し、校舎の見学をしたり、授業に参加したり、ワークショップにおいて多くの人と交流をしたことが最も心に残っています。小学校の校舎には、至る所に児童の作品が展示してありました。地下鉄に見立てた廊下や、色セロハンで作られた木、材料の色を揃えて制作したものなど、児童一人ひとりの思いや先生方の工夫により、廊下や教室の雰囲気が明るく楽しいものになっていたように感じ、何枚も写真を撮りました。ただ並べて飾るのではなく、目をひくような掲示の仕方にする事で、つくったもので周囲を明るくしたり、大切にしたり、友達の作品を楽しく見る目が養われたりするのではないかと思います。」(中西未来・学校教育コース4年)

「ロメロ夫妻に、ペラレホ小学校まで案内していただき、メルセデス先生や校長先生とあいさつを交わしました。お二人とも本当に明るく、親しみやすい先生でこの国でも小学校の教師の雰囲気は変わらないなと思いました。校内には、様々な装飾(子どもたちが造ったもの)がなされていて、日本の小学校とは全く違う雰囲気でした。廊下の壁にマドリッドの街並みを造る予定だといっていました。様々な教室を案内していただいた後、子どもたちの休み時間となり、日本語で名前を書いてくれと多くの子どもに頼まれました。そのあと、2年生のクラスでワークショップを行いました。思ったよりスムーズに進みませんでしたが、子どもたちは初めて触る和紙の感触に感動したり、折り紙を楽しそうに折っていたりしたので、よかったなと思いました。スペインの小学2年生は日本の小学2年生とほとんど変わらないなと思いました。」(岡崎楓・学校教育コース3年)

「日本の教科書教材をもとにしたワークショップでは、言語が通じない中でどのように子どもたちに折り紙のおり方を教えたらよいか、そしてうまくいくのかとても不安だった。日本の小学校2年生に比べ、スペインの子どもたちは折り紙を折るということに慣れていないため、実際に教えてみると思ったように活動が進まないことが分かった。折り紙の角をきちんとそろえて折ることだったり、真っ直ぐ折ることだったり私が予想していな

かったところでつまずく子どもたちがいた。一対一ならば教えることはできても、何人もの子どもたちに同時に伝えることはとても難しく苦労した。これは日本で子どもたちに教えるときにも共通して感じることである。子どもたちにも見通しを持たせ、活動の目標をしっかりと示す必要があったと反省している。しかしそんな中、先にできた子がまだできない子に教えてあげるという場面もあり、子どもたちの共に学び合う姿は日本の子どもと同じであることを感じた。また、折り紙が完成するたびに『できた』という喜びを感じている様子も見られてとても嬉しかった。1つ1つの工程をみんなで確認しながら折ったり、飾りを切ったりしたので時間がかかってしまい、完成の一步手前までしかできなかったのが心残りであるが異国の子どもたちの前に立ち、『教える』という機会をもてたことは自分にとって学びが多かった。」(島千明・学校教育コース3年)

②マドリッド自治大学(Universidad Autónoma de Madrid)における和紙ワークショップについて

「学生を対象としたワークショップでは、八尾の和紙を用いて、日本の1学年の教科書題材を行った。言葉はあまり通じないが、和紙の手触りや色合いを楽しんでいる様子や折り紙が完成したとき、切った折り紙を広げたときに上がる歓声から、日本の文化を楽しんでもらえていることが感じられた。完成した作品を手で喜ぶ姿は、大人も子どもも、日本人であれスペイン人であれ変わらないもので、図画工作のよさを改めて感じさせられた。ワークショップを行ったのはたったの2時間だったが、一緒にものを作り上げることで、学生との距離が縮まったように思う。」(谷川 瞳・大学院教育学研究科2年)

③マドリッド自治大学(Universidad Autónoma de Madrid) 学生との交流について

「マドリッド自治大学の学生との交流を通して、学生たちが折り紙や日本の文化に対して興味を持つことに驚いた。日本の大学生で、同じように外国文化に触れるワークショップを行ったとしても、熱心に取り組む学生は少ないのではないかな。あのように熱心に学ぶとする学生の姿を見て、同じように教職を目指す自分の取り組みについて、改めて考えさせられた。また、スペインの学生たちは熱心に活動に取り組むだけでなく、「日本のよいところはどこ?」「スペインではどこにいったの?」など積極的にコミュニケーションを取ろうとしてくれた。あちらの学生も、わたしも英語は拙かったが、様々な話をする事ができた。言葉は通じなくても、関わり合いをしていくことが大切なのだと感じた。」(石井綾乃・学校教育コース3年)

「ワークショップの後に、学生と芝生でたくさんのお話をしました。私は、ほとんど英語が話せないの、聞いているばかりでしたが、スペインの学生が日本に興味をもっており、日本のファッションや学校の制度など、私たちと同じようなことに興味があるのだということがわ



かりました。文化は違えど、同年代の人の思うこと、興味を持つことは同じなのだと改めて実感しました。」(岡崎楓・学校教育コース3年)

④教員養成のあり方について

「マドリッド自治大学において参加させていただいたのは、小学校教員養成課程の学生対象の音楽の講義だったが、先生も含めて全員がとても積極的で、その上とても楽しそうに講義に参加していたのが印象的だった。教員になるという意識が高く、それが授業態度に表れているようだった。講義の流れは、そのまま小学校の授業に使える技がたくさん含まれており、授業づくりに大変参考になった。体全体をつかって楽しみながら音楽に触れられる講義だった。」(谷川瞳・大学院教育学研究科2年)

「大学では、音楽の講義に参加しました。学生の、子どもに見せるための歌や踊りを練習しているところを見学した際には、一人ひとりが恥ずかしがったり手を抜いたりせず、楽しんだ表情で思い切り表現をしている姿が印象的でした。これまで自分が受けてきた授業では、誰かがふざけたり、照れて表現をためらったりすると、周りもつられてしまい、真剣に取り組むことがどこか恥ずかしいことのように思える雰囲気になってしまっていたように思えます。マドリッド自治大学の学生の皆さんは、この練習が何のために必要であるのか、自分が何をしたらよいのかを全員が理解した上で、真剣に取り組んでいるようでした。先生のご指導が厳しそうな様子でしたが、学生は先生に注意されないようにと構えたり、消極的に活動するのではなく、グループで輪になっている際にお互いの目を見て笑ったり、動きや声に変化をつけて自主的に工夫を図ったりと、積極的に授業に参加していました。活動の様子は手本にすべき姿でした。」(中西未来・学校教育コース4年)

⑤美術館等訪問について

「異国の美術館に行くことは初めての経験で、また世界的に有名な画家であるパブロ・ピカソやサルバドル・ダリなどの作品を目の前にし、とても感動した。美術に関して私はあまり知識もなかったが、今回のプログラムを通して興味を持ち、美術の美しさを感じることができた。また絵画や世界遺産、さまざまな建造物などからスペインの歴史や文化も学び、自分の国のことをもっと知らなければならぬと感じるきっかけとなった。」(島田明・学校教育コース3年)

「今回の訪問では、プラド美術館とソフィア王妃芸術センターに訪れた。両美術館ともに、国際学生証を提示することで入館料が無料になった。学ぶ意欲のある学生



に対する保証が確立している。私たちがソフィア王妃芸術センターを訪れていたとき、ちょうど幼稚園児も来館していた。子どもたちは、

小さな頃から芸術に触れる機会が与えられており、しかし、それは高尚な『鑑賞』ではなく、作品の前で色塗りをしたり、ダリのように顔にひげを描いたり、子どもたちの発達段階にあった、とても身近で楽しく、親しみがもてるものであるようだった。」(谷川瞳・大学院教育学研究科2年)

⑥文化の相違点について

「日本以外の国が初めてだったため、日本と違うことばかりで全てに驚いたといっても過言ではありません。そのなかでも、食事について、一日の生活について大変驚きました。朝食を2回とり、小学校ではスナックタイムが存在しました。サンドウィッチを片手に休み時間を過ごす子どもたちに違和感を抱きました。また、先生方の優雅なお茶の時間も不思議な感覚でした。2時頃から始まる長い昼食も、そのゆったりした時間の使い方や、ボリュームに驚かされました。また、スペインの街を歩いていると、パントマイムをしている人、着ぐるみを着ている人、カップを持ってお金を求めている人に出会いました。日本ではあまり見かけない光景です。仕事が無く、貧しい人たちが生活のためにやっているということも知りました。文化も違えば、貧しさや、仕事も違うということも感じました。美術館に行くと、たくさんの方が美術館内で働いていました。監視している人だけでも、どれほどいるかわかりません。その国の歴史や文化が、今を生きる人に大きな影響を与えることもわかりました。」(吉川奈々・人間情報コミュニケーションコース3年)

「マドリッドの街中には、キティちゃんや日本生まれのお菓子、漫画のキャラクター商品など、見覚えのあるものを何度も見ることができました。逆に、子どものころから馴染みのあるキャンディーが、実はスペインからきていたことや、どの国にもあるお菓子があることを初めて知り、驚きました。ものが国を行き来しながらその国に合うように馴染んでいくように、良いと思ったものや方法をどんどん吸収しながら、自分の実践や考え方に応用させていくことで、柔軟な頭で様々な視点から物事を考えられるようになるのではないかと改めて感じた、素晴らしい滞在でした。」(中西未来・学校教育コース4年)

「スペインの古都であるセゴビアは、中世のヨーロッパを物語る建造物が立ち並んでいた。古城のアルカルサ

ル、水道橋は、見るだけでも圧倒され、見るだけでは分からない裏の話も現地の方から聞くことができた。しかし、そのような建造物にも、日本でも見られるような落書きがしてあり、とてもショックを受けた。これまで私は、スペインやヨーロッパに対して憧れの目で見ていた。しかし、実際には憧れる部分だけではなく、現実的な部分の多くあることが分かった。本やテレビだけでは分からない部分を、実際に行くことで見ることができ、現実を少し知ることができたように感じた。」(石井綾乃・学校教育コース3年)

おわりに

以上、スペインマドリッド自治大学との美術教育に関する研究レベル以外での交流について振り返ってきた。

こうした国際交流で得た成果は大きく、まさに充実した国際交流が行われてきたことを実感できる。もちろん交流で得た知見は日々の大学での教育で生かすことにしている。例えば、講義の中でプレゼンを作成する際に、マドリッドで撮影した風景の画像を使用したり、現地の子どもの作品を紹介したりと、自分が経験した事実を学生たちに伝えるようにしたりしている。実際、日本の漫画等サブカルチャーに類する視覚文化の彼の地での浸透具合を話すと学生たちは本当に驚いている。

また、国は違っても本質的に子どもたちは変わらないし、その子どもたちをきちんと教えて育てて行こうとする教師の姿もあった。教員養成や現職教育に関わる大学では、その営みをいかにサポートしていくかに心を砕いている現状も似ている。

一方、明らかにこちらが教えさせられる内容もある。例えば、スペインの自国の美術作品に対する教育がごく普通に行われている実情を目の当たりにする。振り返って日本の伝統的な美術をどのように教育の中で生かしていくかについては、スペインの美術教育に学ばなければならない点である。

さて、昨年度から子どもたちの作品の交流という新しい企画もスタートした。この年は、射水市立大島小学校の児童作品をマドリッドに送り、大学構内で展示会も開催してもらった。1年生から6年生までの教科書題材を中心にした作品を展示したことで、日本の初等教育段階における指導についても理解を得たのではないかと思っている。

今回の報告では、十分に紹介することができなかった絵画における日本とスペインの子どもの表現の違いについても、いずれ別の機会に論文としてまとめる予定である。

最後にこれまでの訪問でお世話になった現地の方々のお名前を記して感謝の気持ちを表したい。

*** Estefania Sanz Lobo**

(Profesora Titular Escuela Universitaria / Dpto.de

Educacion Artistica, Plastica y Visual) 教授・学校教育学科長・美術教育

*** Pablo Romero Gonzalez**

(Profesor Asociado de Universidad / Dpto.de Educacion Artistica, Plastica y Visual) 准教授・美術教育・教育学部

*** Cintia Rodriguez Garrido**

(Vicedecana de Investigacion e Innovacion) 研究新規開発担当副学部長・教育学部

*** Asuncion Martinez Cebrian**

(Vicerector for International Relations) 国際関係担当副学長

*** Angeles Saura**

(Artista Visual / Titular del Dpto. de Educacion Artistica, Plastica y Visual) ビジュアルアーティスト・美術教育学科長・美術教育・教育学部

*** Ana Mazoy Fernandez**

(Vicecana de Extension Universitaria / Cooperacion y Cultura) 地域連携担当副学部長・文化協力・教育学部

*** Teresa Bordon Martinez**

(Vicedecana de Relaciones Internacionales) 国際交流担当副学部長・教育学部

*** Ana Rodriguez Marcos**

教授・教育学(教授学・教育方法学)

*** Feli Gregoris**

(小学校担任教諭 Peralejo School)

*** Mercedes Hernandez**

(小学校担任教諭 Peralejo School)

*** Inmaculada Gonzalez**

(幼稚園教諭 Peralejo School)

注

- 1 帰国した後で、エスティファニア氏がスペイン語と英語の学生の感想を送ってくださったもの
- 2 2011年6月に行われた InSEA 世界大会(ブカレスト)において、メキシコの大学教員になっていた彼に再会した。
- 3 平成22年度からマドリッド滞在中のホテルは、「ウサ・チャマルティホテル」にしている。チャマルティン駅という国鉄や地下鉄が集まったマドリッドの大きな駅の一つで、マドリッドバハラス空港から近郊線が直通であり、また、マドリッド自治大学へも向かう列車も発着している。
- 4 岸本斉史による人気のある忍者漫画、1999年から集英社の「週刊少年ジャンプ」に連載されている。海外でもアニメ放映されている。
- 5 表現にこめた思い、日本美術研究会「図画工作科5・6下」日本文教出版、p18
- 6 所属コース学年は訪問時のものである。掲載の確認については、レポート作成の指示を行った際に、行っ

ている。なお，基本的にはこうしたレポートを訪問先に送付することが前提であるが，これまでは，簡単な英語文の礼状を大学の関係者にEメールで送信するにとどまっている。今後は，できれば学校等にダイレク

トに礼状を送付できるようにしたい。

(2012年 8 月31日受付)

(2012年10月19日受理)